



生徒数		
1年	98名	3学級
2年	107名	3学級
3年	91名	3学級
4組	1名	1学級
5組	2名	1学級
合計	299名	11学級

多面的にとらえる — ドクダミに想う —

校長 青野 保

校地のあちこちにドクダミの白い花が咲いています（6月中旬現在）。私を含め「ドクダミ」に対して「厄介者」というイメージをお持ちの方も多いのではないのでしょうか。「ドク」という名前の響きや独特の匂い、日陰を好み抜いても抜いても生えてくるその執拗なまでの繁殖力などからでしょうか。実はドクダミの名前は「毒矯（どくだ）み（毒を抑える）」という意味に由来すると言われ、実際に多くの薬効があるそうです。また、時には茶花として使われる「品格ある」一面も持ち合わせています。



幼い頃、両親は私のことを「内気でおとなしい子」と思っていたようです。通い始めた保育所を「友達に意地悪される」と主張して3日で退所し、その後は祖母の傍らで、日がな一日、動物図鑑を見ては絵を書いたり切り絵をしたりして過ごしているような子だったからでしょう。また、4人兄妹の三男坊で兄達に従順にしていたこともそう印象付けたのだと思います。

小学校1年の家庭訪問の時です。母が担任に「うちの子はおとなしくて先生もお困りでしょう」と尋ねたその答えは「とんでもない。にぎやか過ぎて保君の周りを静かな子で囲んでいるんです」でした。目を丸くして私を見る母の顔を鮮明に覚えています。学校では「いたずら坊主」だった私の一面を、母が初めて知った瞬間でした。「ばれたか」と思う一方で、私はなぜかホッとしたものです。母はどう思っていたのか？気になった時に母は既になく知ることはかありませんでした。いずれにせよ、その後私は家族にも「ひょうきんさ」も持つ子として育てられ、伸び伸びと成長することができました。

教師になって数年経った頃、担任クラスの学級委員をしていた女子生徒に、何かのきっかけで「〇〇さんて、案外おっちょこちょいでしょ」と言ったところ、「そうなんです。でも、先生達ってそうは思ってくれないんです」と「しっかり者」のイメージを背負い続けることの苦勞を打ち明けてくれました。「早く気付くべきだった」と反省しつつ、その後、「〇〇さん、うっかりするなよ」などと声掛けするようにしたところ、随分リラックスして活動するようになったのが思い出されます。

私は、日々生徒に関わる中で、その子の「一面にとらわれることの危うさ」を意識するよう心掛けています。一面のみで接し方を固定してしまうことは、その子の持つ可能性を摘んでしまうことになると思うからです。授業中は物静かだけれど休み時間は友達とにぎやかに活動している、計算は苦手そうだけれど「ものづくり」は緻密だ…。どの子にも強みや弱みがあるものです。一人一人を多面的にとらえ、良い面を見つけてさらに伸ばし、それをもって苦手を克服するための武器とするようサポートしていく。それが周囲にいる責任ある大人の務めだと考えます。

間もなく夏休みを迎えます。学校がある日々とは異なる生徒の様子を垣間見ることがあるでしょう。それぞれの子供が持つ多くの側面を発見できる長期休業にさせていただきたいと思います。また、生徒達には、自分自身の新たな一面（可能性）に気付けるよう、質・量ともに豊かな体験をして欲しいと願っています。

校庭で摘んだドクダミを一輪挿しに生けて校長室に置いてみました（右上の写真）。改めて見て、今更ながら葉がハート形をしているのに気が付くとともに、本校生徒達の豊かな心（ハート）の育成に向け決意を新たにしました。